

TAT 物語にみる男性像—女性像

辻 井 景 子

Male and Female in TAT Fantasy

Tsujii Keiko

問 題

人は、少数の例外を除いて生物学的にオスに属するものとして、あるいはメスに属するものとして生まれてくる。この事が、その人間の性格に、又は心の構造にどのような影響を与えるのだろうか。

プラトンの「饗宴」の中には頭が2つ、手足が4本ずつという両性具有の人間が登場し、神の怒りに觸れて2つに切断されて今ある人間が誕生する話があるが、心理学的な両性具有への関心は近年再び盛んになりつつある。

「男性と女性が両性に向う素因を持っているという認識は精神分析の内部でも、外部でもさ程目新しいものではない」と Winicott は述べているが、既に Freud も「個々人というものは、全てその両性的な素質と交叉性の遺伝の結果として、男性的と女性的との両性性格をそのうちにとともに併せ持っており、純粋に男性であるとか女性であるとかは理論的な構成物にすぎない」と考えている。

しかし、この様な「両性に向う素因」を持ちながらも、「自分は男である」あるいは「自分は女である」という確信—性同一性—を持つことは健康な人格にとって重要な一側面になっている。Erikson は青年期の課題として Identity (自我同一性) の獲得を挙げているが、性同一性はこの自我同一性の重要な一部分をなしていると考えられる。思春期から青年期にかけて、この性同一性を獲得することは重要な課題であり、又困難な問題でもある。

「自分は～である」という認識は、「自分は～ではない」という認識と表裏一体となっている。「自分は男である」ということは「自分は女ではない」ということであり、「自分は女である」ということは「自分は男ではない」ということである。両性に向う傾向を持ちながらも、人は他方を否定しながら自己の性同一性を確立していく。そしてこの認識の周辺には様々な男性—女性にまつわるイメージが存在している。

各個人の抱く男性像—女性像は現実中存在するある人間の姿とは異なっている。しかしその個人にとって重要なものは現実の姿よりもむしろその個人の持っているイメージであろう。人は自分の持つ男性像—女性像に従って行動し、認識する。もちろん、その結果から男性像—女性像も又様々に修正されていくであろうが。思春期から青年期にかけての男性像—女性像がどの様に変遷してゆくかを明らかにすることは、性同一性がどの様に形成されていくかをみるための1つの方法であろう。

男性像—女性像については形容詞を用いた一連の研究が行なわれている。しかし、それらの研究によって明らかにされる男性像—女性像は意識の表層部に近い部分である。又、その男性像—女性像は単語の寄せ集めの静的な像であり、男性が女性にどの様に関わるか、あるいは女性が男性に対してどの様に存在するのか、という2つの性の動的な関係のイメージを描き出せない。

投映法テストの1つである TAT 図版の中には男性と女性が登場する何枚かの図版がある。これらの図版に対して作られる物語は男性と女性の関わり合いについての各個人のイメージを引き出すであろう。

本稿では、男性と女性の登場する TAT 図版を用いて、その中にみられる男性像と女性像、及びその関係を探るとともに、思春期から青年期という性同一性の確立期にあたって、それらがどの様に変遷し、又そのことがどの様な役割を果しているかを考察することを目的としている。又、今回は普通施行の他に異性役割施行を実施した。人はどこまで異性を理解しえるのだろうか。あるいはどこまで異性に同一視しえるのか。異性役割施行において異性の持つ男性像—女性像にどれだけ近づくことができるのか。あるいは、どの様な点で近づきえないのか、を明らかにすることができれば、男性と女性の心理的特性を理解する1つの手掛りが得られるかもしれない。

方 法

1. テスト：Murray 版 TAT 図版のうち男女各一名が描かれている 4, 6BM, 6GF, 10, 13MF と Blank Card (白版) の計 6 枚が使用された。TAT の施行順序は 4→6BM→6GF→10→13MF→Blank Card である。

2. 施行方法：テストは2回行なわれ、1度目は普通施行、2度目は異性役割施行である。1度目と2度目には1～3週間の間隔がおかれた。

1度目の教示「これから6枚の絵をスライドでお見せします。各々の絵について短かいお話を作って下さい。これは何が描かれているのか、これ以前に何があったのか、これから以後どうなるのか、という様に過去・現在、未来について書いて下さい。これが正解というものはありませんから思いついたことを自由に書いて下さい。時間は約4分です。」

2度目には「今回はあなたが異性になったつもりで、男性なら女性に、女性なら男性になったつもりで書いて下さい。」という教示が付け加えられた。

テストは集団で施行され、図版はスライドで提示された。

3. 被験者：K市立中学2年生男女各30名。K市立高校（共学）の2・3年生男子25名、女子29名。単科大学（工学系）男子30名。女子短期大学女子30名。

結 果

物語の筋がいくつかのカテゴリーに分類された。カテゴリーの内容は図版によって異なっている。評定の一部は2名の評定者により評定され72%の一致をみたので、残りは1名のみで行なわれた。

1. 4 図版

まず普通施行について、「男性が行こうとしているのを女性が止めている」という物語が一番多いが、男性が全て「男性は出て行く」結果になるのに対して、女性では中学生4名、高校

辻井：TAT物語による男性像—女性像

表1 4 図版の物語

		男						女					
		中学生		高校生		大学生		中学生		高校生		大学生	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
女のために	男性が出てゆくのを 女性がとめている。	1	2	0	1	1	0	1	0	5	1	3	2
女とけんかして		18	19	10	11	8	17	7	15	7	10	7	12
女の関係なく		5	2	5	3	17	8	10	4	7	3	11	10
男性の困難に対する女性の援助		1	2	3	5	3	3	9	9	8	10	8	6
そ の 他		5	6	7	5	1	2	3	2	2	5	1	0

(註. Iは普通施行 IIは異性役割施行)

生3名で「男性が思い留まる」結果になる。

又、男女の差がみられるのは、「男性が困っているのを女性が助ける」物語においてである。普通施行では男性7名に対して女性は25名、異性役割施行においては男性10名に対して女性は25名である。この物語は「男性が精神病で興奮」していたり、「病氣」であったり、「仕事に失敗して気を落して」いたりするのを女性が「看病」したり、「慰め」たりする物語である。

異性役割施行では約半数の92名が別の物語を作っており、その中でも15名が一人称を使って物語を作っている。

男性では「男性が困っているのを女性が助ける物語」は普通施行と比べて増加はしないが、高校生5名、大学生10名で「女性の制止で男性が思い留まる、又は帰ってくる物語」に変化した。

2. 6BM

この図版では母—息子の物語が大部分であるが、中学生の男子では夫婦又は恋人関係が4名みられた。

「息子が出て行く」原因として、「仕事」とするものが男性17名に対して女性28名、「結婚」と

表2 6BMの物語

		男						女					
		中学生		高校生		大学生		中学生		高校生		大学生	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
仕事のため	} 息子が出て行くところ	8	3	6	5	3	0	12	1	8	11	8	4
結婚のため		5	3	5	3	4	6	4	5	5	8	1	3
息子が母に相談している		2	1	3	4	7	7	5	3	5	5	2	6
息子が帰ってきたところ		0	0	6	0	7	3	4	5	1	1	8	7
母子が一緒に悲しんでいる		3	2	0	0	5	4	1	3	4	0	6	1
そ の 他		12	21	3	13	4	10	3	13	6	4	5	9

するものが男性14名に対して女性10名で、女性の方が「仕事」としやすい傾向がみられた。又、息子が出て行った後、「仕事が失敗したり、又は結婚後3人一緒に暮らすようになる物語」は男性5名に対し女性11名であった。

異性役割施行において男性で「その他」のカテゴリーが増加するのは、母—息子関係以外の物語が増加したためである。高校生・大学生では「男—友人の母、恋人の母」が増加するのに対し、中学生では「女親分—子分」「刑事—女」などがみられ、又母—息子の Sex の話がみられたり、物語が作れない者が増加した。又、一人称を使った5名のうち3名が絵にない人物—男の恋人・妹—を「私」としている。残り2名のうち1名は絵の女性を「私」としているが男を恋人としているため、母—息子関係で母親を私としているのは1名のみであった。

3. 6GF

この図版は「父—娘」に関するカードとされているが、実際にはその関係の物語は少数しかみられない。筋の男女差も顕著ではないが、「男性の誘惑によって女性が幸せになる物語」は男性が10名に対して女性は3名であり、どちらも中学生・高校生であった。

表3 6GFの物語

		男						女					
		中学生		高校生		大学生		中学生		高校生		大学生	
		I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
男性が誘惑する	女性引き込まれる	3	3	7	3	5	2	9	5	2	5	3	5
	不明	1	1	3	6	6	3	6	3	4	4	3	10
	ことわる	4	5	3	2	3	7	2	3	6	6	5	3
	幸せになる	6	4	4	0	3	0	1	0	2	4	0	1
知人の男性	親和	9	5	1	2	8	3	8	5	12	4	9	4
	不和	2	2	2	3	3	10	0	2	0	4	1	0
その他		5	10	5	9	2	6	4	10	3	2	9	7

4. 10図版

再会後の「別れ」も含めて「別れ」の物語を作る男性16名に対して女性は39名であり、異性役割施行においても男性12名、女性25名とこの傾向は変化しない。

異性役割施行では中学生の男女に「その他」のカテゴリーが増加するが、それは独創的とも支離滅裂ともいえる物語が増加するためである。例えば中学生の男子では、「オカルト映画を見に行きたがっている子どもに夫婦が実演してあきらめさせている。」「女の母が死んだ。父の乳で育ち2カ月で20才になった。」とか「男が妊娠して20年して女の子が生まれる。女は身体は大人だが知能は子どもで父の乳にしがみついている」など。他に直接的な性的物語が増加する。一方、中学生の女子では、「男がプロポーズするが女は夫を持っている。男は夫を殺す。しかし夫は生きていて男も女も殺す。」「男は金が目当てで女を殺す。女の父が殺し屋に男を殺させる。」「吸血

辻井：TAT物語による男性像—女性像

表4 10 図版の物語

	男						女					
	中学生		高校生		大学生		中学生		高校生		大学生	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
親子・夫婦・恋人の別れ	3	3	7	7	5	2	11	11	13	6	15	8
再 会	5	1	7	9	6	11	5	2	4	7	1	9
親子のいたわり	0	0	1	1	1	1	4	0	2	2	3	2
夫婦・恋人の抱擁	14	5	6	5	10	7	3	5	6	9	5	5
男性が女性をなぐさめる	3	1	3	1	5	3	6	3	3	2	6	3
そ の 他	5	12	1	2	3	6	1	9	1	3	0	3

鬼が血を吸っている。女も吸血鬼になる。胸にくいを打ち込まれて死ぬ。」その他にも吸血鬼の話が2名あり、残酷な物語が増加する。

5. 13MF

図版中の女性を死体として物語を作る場合でも、その女性を図版中の男性が「殺した」とする男性が14名であるのに対し女性は36名あり、「病死あるいは第三者による殺害」とする男性が30名に対し女性は28名と、女性の方が直接的な殺人とする傾向が強く、特に「愛して殺す」という物語が特徴的である。Sexの話は男性25名に対し女性11名で、男性の方が多い。そしてこの両傾向は異性役割施行においても変化しない。

又、他の図版でもみられた中学生男子の特徴がこの図版では最も強く現われた。例えば「山小屋で変な関係になり、男の人が首を締めて殺す。」「仲の良すぎる恋人、アレをして後悔している」「裸になって…して、女が男の手に噛みついて男が泣いている。」「男が女を好きでアレをやり、出きるとまずいので殺して後悔している。」「高校生売春婦、十三発もやって女が寝ている。男は疲れて金がないので泣いている」など、Sexは死・破滅と結びついている。異性役割施行においてはこの傾向は更に増幅されてしまう。「二人でねんねした。女はあまりの刺激のために死んだ。

表5 13 M F の 物 語

	男						女					
	中学生		高校生		大学生		中学生		高校生		大学生	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
死んでいるのを発見する	8	4	12	7	11	11	6	5	9	6	12	15
男性が女性を恨んで殺す	4	3	2	3	4	2	4	4	4	4	6	6
男性が女性を愛して殺す	1	0	1	2	2	3	9	8	8	7	5	5
sex	14	12	5	10	6	8	2	5	5	5	4	3
そ の 他	3	11	5	3	7	6	9	8	3	7	2	1

男はうれし泣きしている。」「恋人でアレをやった。やりすぎて女は死ぬ。男もやりすぎて精液が出なくなる。」など。

高校生男子の異性役割施行の中で3例「不能の物語」がみられた。「私は絶望して起きれない。彼は見かけだけの役立たず。それに泣いたりして、私は新しい男を見つけるわ。」「男は不能で泣いている。女は投げやりになっている。2人は友達として生きる。」「始めて女と寝た男。男はすぐにもれてしまい泣いている。女はやる気を失くしている。」というもので、これは女性の異性役割施行にはみられないものであり、又男性の普通施行においてもみられない。

6. Blank Card

この図版の普通施行では、主人公が人間の場合ほとんど同性が選ばれる。唯、中学生・高校生女子の中に「男の子」又は「少年」を主人公にするものが8各、成人の男性を主人公にするものが1名みられた。

大学生男子では物語は短かく簡潔である。又、物語の作れない者が6名あり、中学生男子の4名よりも多く、他の図版と逆になっている。白に関する物語も、「何もない白」「爆発したところで真白」「スライドの光がみえる。これは希望の光である」というように物語的な膨みを持たない。又、異性役割施行においては「恋愛・結婚の物語」が30名中16名になり、それも幸せな物語が多くなる。しかし大学生女子に特徴的な草原の描写や「家族の物語」はみられない。

前述した様に大学生女子では、「草原の中の幸せな私、女性、家族の物語」が30名中12名あり、草原を舞台にしない「幸せな家族の物語」を入れると30名中16名と過半数を越える。大学生の女子はどのグループよりも物語の画一性が高い。異性役割施行においても30名中13名が海・山・空を舞台にした活動的な異性の物語を作り、普通施行の「草原の女性」と対応を示している。

高校生男子では、白の話や作れない者は他の男子グループより少なく、主人公も神・道・ソビエト政府・SL 等と多彩である。しかし、異性役割施行においては「目が醒めたのに真白で何も見えない。」「何も見えない。未来はわからない。」といった白の話が増加し、又、「恋愛・結婚の物語」も25名中7名と、大学生男子に比べ少ない。

高校生女子では「家族の物語」は5名となり、大学生女子との差を示している。主人公は少年・少女が多く、又「アンという少女とドンという飼犬の話」や「ラッタとミーミという猫の話」「ケーキ屋に勤める2人の少年の話」「雲の上に行きたい男の子の話」という様にメルヘンの物語が特徴的である。異性役割施行をとった場合には大学生女子と同様に29名中12名が活動的な男性を主人公にした物語を作った。

中学生男子では同性の人物1名を主人公にした物語が多く、高校生男子の様な多彩さはみられない。唯、白に関する物語ではどのグループよりも独創的である。「画家が何かを描こうとして心臓発作で死に、白いキャンパスが残った。」「透明人間が見えるようにと白い絵具を塗って写真を撮ろうとしたが雨が降ってきた。」「白い紙、という題の絵を見つけて美術館へ持って行った。」など。異性役割施行においても同性を主人公にするものが4名あり、又「恋愛・結婚の物語」でも「女の人が裏切った男の人を殺して捕まって自分も死ぬ。」や「結婚したが男が浮気をして女の人が泣いて帰る。」など不幸な物語が5名あり、異性役割をとることの困難さを示している。

中学生女子では捨て子・孤児など高校生よりも年令の小さい主人公が増加する。従って女子は、中学→高校→大学と年令が上がるに従って物語上の主人公の年令も上がっていく。異性役割施行

では同性を主人公にするものが2名みられたが、男性及び少年を主人公にするものが13名ある。しかし長い物語風のもが多く男子の作る物語とは異なっており、又、高校生・大学生女子程画一化されてはいない。

考 察

1.

TAT の物語において自分の性にふさわしい性に同一視することのできない人は、自我の機能に何らかの障害を持っていると考えられている。Groh (1956) は、TAT の中で同性のものに同一視した主人公の数と自我の強い事は密接な関係にあると述べている。しかし物語上の主人公は描かれている人物の位置・大きさ・姿勢など図版自体の刺激特性によって規定されるため、被験者の性に直接左右されるとは考えられない。例えば今回のテストで使用された4図版では前方に描かれた男性が主人公に選ばれる事が多く、6BM では中央に描かれた男性、13MF では前方の男性が主人公になる。6GF では女性を主人公にする者が多いが、時に2人の物語として作られるため、主人公をどちらかに決定することは難しい。従って主人公の性別だけを性同一性の指標にすることはできない。では、主人公以外の物語の中にみられる男性と女性のあり方について考えてゆこう。

4図版では女性は男性に比べて、「男性が困っているのを女性が助ける」という物語を多く作る。この傾向は普通施行の場合も異性役割施行の場合もほとんど変化せず、又、年齢による差もあまりない。「慰めたり」「看病したり」する女性像は、男性にとってよりも女性によって親しみやすいものと考えられる。この女性像は保護的・養育的といった母性的特徴の良い面を持つ女性像といえるだろう。

6BM ではほとんど母—息子の物語であり、女性でも息子を主人公にした物語が多く、性差はほとんどみられない。唯、「息子が出て行く」という母親からの息子の自立のテーマにする場合、男性ではその理由として「仕事」とするものと「結婚」とするものが同数程度であるのに対し、女性では「仕事」とするものが男性に比べて多くみられる。又、自立が失敗する物語も女性に多い。この理由として、1つには男性を物語上の主人公としながらも女性への同一視が働き、男性の自立を女性＝自分からの離反、他の女性のための離反とするよりも、「仕事」とする方を好むためではないだろうか。「一度出て行った後、失敗して帰って来る」ことになったり、「結婚後3人で一緒に暮す」など自立が失敗する物語は、女性の場合、「自立する事に対する不安」というよりも「自立される事に対する不安」又は「自立させない自信」という意味を持つ場合があると考えられる。そしてこれは母—息子関係における母の不安であり、第4図版の女性像とも関係してくる。すなわち自分の膝下からの旅立ちを許さない女性は、第4図版でみられた「慈しみ育む女性」の裏面であり、それら2者は表裏一体の存在である。そしてこの女性像は、大学生女子のBlank Card で過半数を占める「幸せな家庭、家族の物語」の中で明確に描かれている。「幸せな家庭の物語」を作る時、女性は女として、あるいは妻としてあるのではなく、母として一家の女主人として存在している。母としての存在の中で満ち足りて幸せな女性像は、女性の中でも年齢の上昇とともに大きくなり安定したものになると考えられる。

4, 6BM 同様 13MF も男性が主人公に選ばれる事が多い図版であるが、この中にみられる女

性像はやや異なっている。女性の場合、図版に描かれている男性が直接女性を殺すという物語が男性に比べて多くみられ、特に、「この男は女を愛しているが抵抗され、あるいはふとしたはずみで殺す」という様に、殺人は愛の表現として、劇的なクライマックスとして用いられている。この物語を作る時、女性は殺す側の男性よりも殺される側の女性に同一視しているのではないかと思われる。この図版では、「女性の場合、男によって強姦される事、あるいは誘惑される事、又虐待される事への恐怖を引き出すかもしれない」(Bellack, 1954)といわれているが、殺人の物語は恐怖と同時に、愛の最高の表現として「殺されることへの願望」をも示しているのではないだろうか。この女性像と関連するものとして、10図版において「別れの物語」が男性よりも女性に多くみられる事が挙げられよう。その別れは「戦争」や「仕事」「親の反対」、理由ははっきり述べられてはいないが「どうしても別れなければならない」という様に、外からの強い力によって引き離される別れである。人数は少ないが再会後の展開は特徴的である。男性の場合、再会の後には「これから一緒に暮す」という物語がほとんどであるのに対し、女性は「再会しても又別れる」が約半数を占める。女性は飽くまでも「別れ」に固執している。そして異性役割をとった場合にも女性はこの「別れ」から別れ難い。この永遠に繰り返される「別れ」は「死による愛の成就」という物語へ展開するのであろう。この女性像は古くから繰り返され、女性に好まれてきた悲劇の中の女性像の1つの典型といえるだろう。

しかし、この女性像は4, 6BM, Blank Card でみられた女性像とは一致しない。それは4, 6BM, Blank Card の女性像が母性を中心にした女性像であるのに対し、13MF や10図版にみられる女性像が男性に対する女としての女性像であるためと考えられる。それはいわば乙女の像であり、男性との出会いが問題になる女性である。Neuman (1955) は女性の原型としてのグレート・マザーとアニマ、そのプラスとマイナス面の作り出す数々の女性像について述べているが、個々の女性の中にはこれらの原型が様々な女性像となって存在するのであろう。そしてこの数々の女性像の中で最も強力でかつ安定した女性像は4図版や6BM、そしてとりわけ Blank Card で特徴的にみられた様な母性的な女性像である。それに対して男性に対する女としての女性像はまだ弱く、悲劇のヒロインとしての乙女として存在しているのであろう。長年女性に好まれてきた悲劇は女性の中にある2つの女性像の相克を映し出しているのかもしれない。そしてこの2つの女性像の相克の様相は、日本という風土の特徴であるかもしれない。

2.

異性役割施行をとった2度目のテストでは約半数が物語を変化させている。この変化の原因の1つとしては教示による強制が考えられる。同じテストを2度行ない、かつ「今度は～」という教示を与えるため、教示内容によるよりも2度目という条件が物語の変化を導いたと考えることができる。しかし変化した物語の中では、異性を主人公にしたり、又図版上の異性を一人称呼んで物語を作るなど、なんとか異性役割をとろうとする努力がみられる。一人称の物語は普通施行の場合、Blank Card を除いてはみられないものである。この様に異性役割をとろうとする努力は被験者のテストへの協力を示すとともに、「TAT 物語において異性は違う物語を作るであろう」ということ、更に進めれば「fantasy において男性と女性は異なっているであろう」という意識的・無意識的認識を示していると考えられる。しかし、物語を変化させても、あるいは異性を主人公にしたり、一人称を使用してもそこに見られる男性像一女性像は必ずしも異性の持

っている男性像—女性像とは一致しない。

例えば4図版において、「男性が困っているのを女性が助ける物語」は、普通施行同様異性役割施行においても男性よりも女性に多くみられた。男性は「慈しみ育む女性像」よりもむしろ、「女性の制止で男性が出て行くのを思い留まる。又は、出て行った後に帰って来る。」というように女性の支配力を強化する方向へ変化する。慈しみと拘束という両特性は考察1で述べた様に母性にまつわる女性像の持つ特性と考えられるが、男性の場合その拘束力を強調する傾向が出るようである。それは自立という課題を背負った男性がそれを引き留める母性というものに positive に一体化できないためではないだろうか。

同様なことが6BMについてもいえるであろう。6BMでは男性がどの年齢においても「その他」のカテゴリーに分類されるものが普通施行よりも増加した。それは人物の関係が母—息子の関係から作られる物語はその個人にとってある程度限定されているため、物語の設定自体を変化させようとするのであろう。特に男性で関係自体を変化させるものが多いのは、この図版が男性用の図版であり、かつ母—息子関係をみるのに重要な図版であるとされている様に、ある1つの complex を強く引き出す図版ではそれ以外のものへの視点の変換が困難で異性役割が特にとりにくくなるのではないかと思われる。又、男性は異性役割をとった場合に一人称で物語を作っても図版上の女性を母親として主人公にすることができず、妹や恋人など図版に描かれていない人物を登場させる。異性である上に年齢がかなり違う人物に一人称を使う事は難しく、自分と同年令の女性を作り出す必要があるのであろう。そして更に、母親への同一視は男性にとって非常に困難な事なのかもしれない。

10図版で女性が「別れ」から離れ難い事は普通施行においても異性役割施行においても変化しないことは既に述べたが、男性は異性役割をとった場合でも普通施行時よりも「別れの物語」が減少し、逆に「再会して幸せになる物語」が増加する。男性は女性の空想をもっと幸福なものと考えているのであろう。「できるだけ幸福な物語を作ってください」という教示に対して、男性の方が女性よりも幸せな物語を作った(木村, 1961)という事とも関連し、悲劇は女性の好むテーマである。又、「別れの物語」の中にみられる悲劇が女性の中にある母性的女性像と乙女的女性像の相克の中で作り上げられる悲劇であるとするならば、男性は母親から乙女を奪い、彼女を幸せにすることによって男性たる登場資格を与えられるといえるであろう。男性にとっては「別れ」ではなく「再会」し獲得することが異性としての課題となる。異性役割をとった場合、男性は「再会して幸せになる女性像」を描く事が容易であり、危険性が少ない。なぜなら彼は自己の男性としての同一性を捨てる必要がないからである。このことは6GFの普通施行において「男性の誘惑によって女性が幸せになる物語」を作る男性の心の中にもみられる。6GFにおいては、女性が物語上の主人公に選ばれる事がなく、物語の筋にも際立った差異はみられない。しかし男性は女性に比べて「男性の誘惑によって女性が幸せになる物語」を作る事が多い。「昔、この女の人は学問に専念していた。しかし、ある日ある男に言い寄られてしまう。将来はこの2人は幸せになる」(高校生男子)という女性を主人公にした物語であっても、それは誘惑者としての男性の自己肯定としても読みとれる。「女性が幸せになる物語」は特に中学生・高校生男子にみられる。中学生・高校生の男性においては女性を主人公にしながらも男性への同一視が働いているのであろう。そしてそれは男性としての自己肯定の必要性が大きいためではないかと思わ

れる。その裏には自分の男性性に対する不安が潜んでいるのではないだろうか。一方、母親に同一視する事は男性にとっては危険なものであろう。それは彼の男性としての同一性を否定するものなのだから。

Blank Card においてもこの2つの女性像に対する男性のあり方が現われていると思われる。Blank Card では全ての被験者集団で異性を主人公にした物語が増加する。何の刺激もない図版によって作り出される男性像はそれだけその個人の内的な異性像との関係は深いであろう。男性は年齢が上がるに従って、結婚や恋愛に関する物語を多く作るようになる。確かに女性の普通施行においても恋愛・結婚の話は増加するが、大学生女子では恋愛・結婚自体よりも家庭・家族の話が多くなる。恋愛・結婚は心理的には乙女が男性と出会うことによって女もしくは妻になる1つの儀式である。それに対し家庭・家族の幸せを支配するのは母親である。男性にとっては恋愛・結婚にまつわる乙女の像に同一視するよりも母親に同一視することの方が難しいのである。

男性にとっては自己の男性としての同一性の獲得とその喪失に対する不安が大きな問題となっていると考えられるが、それは普通施行時よりも異性役割施行時により明確に現われると思われる。13MF の異性役割施行において男性では Sex の話が増加し、特に中学生・高校生でその傾向が大きい。他の図版においても女性に比べ男性の方が Sex の話を多く作る傾向があり、それは異性役割施行において特に目立つ特徴である。Sex に対する社会的な抑制が女性に対して男性よりも強く働いていると考えることもできるが、一方では Sex を通じて男性はその男性としての同一性を証明しようとすると考えられる。そのことは 13MF の異性役割施行における高校生男子の「不能の物語」に特徴的にあらわれている。「不能の物語」は女性にはみられないもので男性独特の、特に高校生という時代の不安ではないだろうか。しかしこの物語は男性の普通施行時にはみられないものである。異性役割をとろうとする意図的努力が逆に、不安や葛藤の強い領域では自我のコントロールを乱してしまい深く抑圧された感情や不安が表現されやすくなるためと思われる。今回使用した TAT 図版6枚のうち、4, 6 BM, 13MF は男性が主人公に選ばれる事が多い。これらの図版では女性は普通施行時において既に男性に同一視し、ある程度異性役割をとろうとしていたと考えられる。従って女性の普通施行時にみられる女性の中の女性像は、男性が異性役割をとろうとした時に自我のコントロールの乱れの狭間から見せたレベルと同程度のものであると思われる。それ故、そこにみられる母性的女性像と乙女的女性像のドラマは異性役割施行においてもあまり変化せず、又男性にとっては異性役割をとっても理解しにくいものであったと考えられる。同様に女性にとっては、男性としての同一性にまつわる不安は共感しにくいものなのである。

3.

中学生から大学生にかけての年令的な要因では、男子の場合、中学生と高校生・大学生の間に1つの区切れが存在するようである。中学生男子の場合、物語の構成が弱く支離滅裂で物語としての分類が不可能であるため、「その他」のカテゴリーが他の被験者集団より多くなる。そして 13MF のみならず全ての図版において性的な物語が多くみられる。例えば 6 BM の母一息子、あるいはそれに類似した関係としてみられる事の多い図版においても、恋人・夫婦といった不自然な関係の物語になったり、10図版では「別れを惜しんで」や「再会を喜んで」という理由を作る事は少なく、単に「恋人が抱き合っている」という物語が多い。それは単にテストに対する

モチベーションの低さや、物語の創造力の貧困という理由だけではないだろう。なぜなら Blank Card における「白の物語」では大学生男子より中学生男子の方が物語的であり、創造的であった。従って中学生男子にみられる性的物語の多さは、些組な性的刺激によって激しく揺さぶられる性衝動の強さと、それを統制しきれない自我の弱さを示していると考えられるだろう。13MF ではその傾向が更に増大し、半数は Sex の話になり、それも直接的な表現であると同時に攻撃的であり破壊的である。Sex の後では相手を殺したり、後悔したりという様に不安と罪障感に襲われる。「妊娠の不安」という形で表現される事もあるが妊娠に対する現実的な不安というより、むしろ性衝動に対する不安、ないしは噴出してしまった性衝動に対する罪障感であろう。

中学生女子では普通施行では高校生・大学生と大きな違いはみられないが、異性役割施行においては特に10図版にみられる様な残酷な物語が増大する。男子も女子も思春期という危険な時期の様相を示しているといえるだろう。

高校生ではむしろ内的な嵐は鎮まり、男子にとっては男性としての同一性の獲得とその失敗に対する不安が現われ、いわば「不能の不安の時代」に入る。それに対して女子では Blank Card で特徴的にみられる様に「メルヘンの時代」に入ると考えられる。中学生・高校生女子の中には Blank Card で「少年」を主人公にするものがみられる。Caligor (1951) は Blank Card で同性を主人公にすることは無意識的な性同一性を測定するのに有効な指標であるとしているが、中学生・高校生女子においては異性を主人公にしている、それは性同一性の混乱とはいえないであろう。むしろ、性という区別が重大な課題にはならない時代、男性に出会う以前の乙女の時代といえるのではないだろうか。

大学生に入ると女性では乙女的な女性像は影を薄め、母親的な女性像が優位になる。と同時にその男性像も画一化されてくる。

唯、年令的な変遷をみるためには、継時的な内的世界のヒストリーを資料とすることが必要であろう。

文 献

- Bellack, L. The TAT and CAT in clinical use. New York : Grune & Stratton, 1954.
- Caligor, L. The determination of the individual's unconscious conception of his own masculinity femininity identification. Journal of Projective techniques and Personality Assessment, 1951, 15 494-509.
- Erikson, E. H. 小此木啓吾訳・編 自我同一性 1973 誠信書房
- Freud, S. 懸田克躬訳 性欲論 1969 日本教文社
- Freud, S. 高橋義孝訳 愛情の心理学 1969 日本教文社
- Groh, L. S. A Study of ego integration by means of an index of identification derived from six TAT cards. Journal of Projective Techniques, 1956, 20, 387-397.
- Jung, E. 笠原嘉・吉本千鶴子訳 内なる異性—アニメとアニムス— 1976 海鳴社
- 河合隼雄 ユング心理学入門 1967 培風館
- 木村駿 TAT 診断法入門 1964 誠信書房
- Neuman, E. The Great Mother. New York : Princeton University Press, Princeton, N. J. 1955
- プラントン 久保勉訳 饗宴 1952 岩波書店
- Winicott, D. W. 橋本雅雄訳 遊ぶことと現実 1979 岩崎学術出版社

(本研究科博士後期課程)